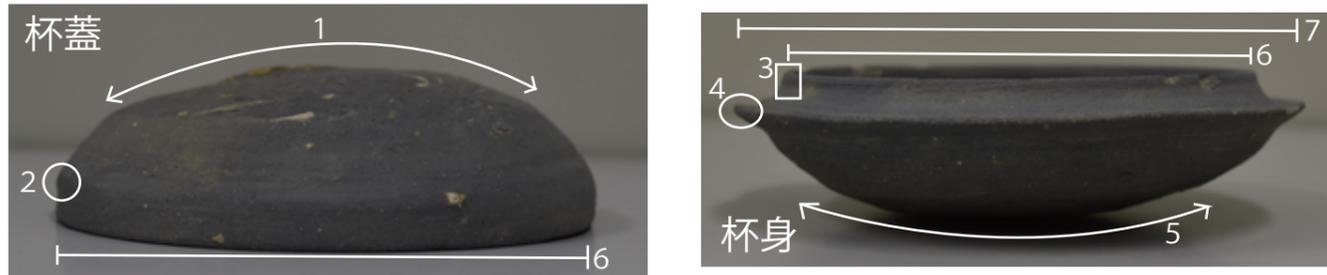


【4.ここに注目!! 須恵器の見方】



1:天井部 2:稜線 3:立ち上がり部 4:受け部 5:底部 6:口径 7:受け部径

岡遠田南遺跡からは須恵器の杯(当時の食器)が複数、出土しました。須恵器の杯は数多くの遺跡から出土するもので、年代ごとに著しい変化を遂げるため、時期決定の手掛かりとなる遺物です。そこで、ここでは須恵器の変化のポイントを紹介したいと思います。ぜひ、土器を見る際に参考にして見てください。

須恵器杯の特徴で最も注目したいのが、天井部(1)と底部(5)に施される調整です。ちなみに調整というのは、ロクロから切り離してできた表面の荒れを削り整えることを言います。この調整は時代とともに行う範囲が狭くなり、次第に調整を行わない(ロクロから切り離れたまま)ようになります。また、須恵器杯は次第に小型化していくため、口径(6)や受け部径(7)が小さくなっています。さらに、受け部(3)が内側に曲がるや稜線(2)が不明瞭になるといった傾向も認められます。

【5.まとめ】

岡遠田南遺跡では、古墳時代末から飛鳥時代にかけての掘立柱建物や土器を投棄した土坑が見つかりました。同時期とみられる掘立柱建物が、北側に隣接する岡遠田遺跡やその西側にある遠田遺跡でも複数棟見つかったため、岡田台地上に古墳時代末から飛鳥時代にかけての大規模な集落があったことが明らかになりました。また、土坑から出土した須恵器についても同一の土層から出土したまとまりのある資料で、須恵器の編年(時間のものさし)を行う上で貴重な資料といえます。

また、現在調査中にはなりますが6区Cから岡遠田遺跡で複数、確認している屋外排水溝をもつ竪穴建物が検出できたため、岡1号池周辺に集落を築いた集団の一部がやや南に移動している可能性が出てきました。

【語句説明】

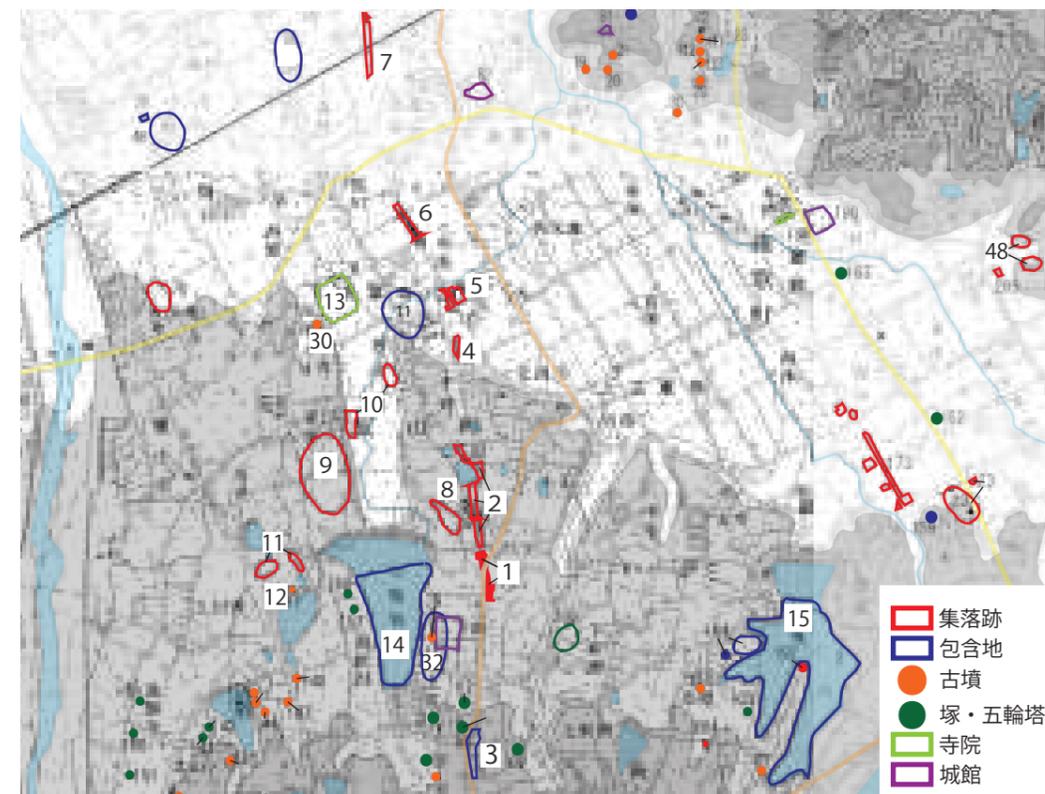
- 掘立柱建物：電柱のように地面に穴を掘り、そこに柱を立てる建物。縄文時代からその存在が確認されている。
- 須恵器：1千度以上の高温で窯焼きされる硬質で灰色をした焼き物。5世紀に朝鮮半島の土器の影響を受けて国内で生産が始まり、全国各地の遺跡で多く見つかる遺物の一つとなった。
- 遺跡：過去の人々が何らかの活動を行った場所で、建物・溝・ゴミ捨て穴などの痕跡(遺構)や食器・調理具の土器、狩りや穀物の収穫で使った石器といった道具(遺物)が見つかる。

【1.はじめに】

岡遠田南遺跡は丸亀市飯山町上法軍寺に所在する集落遺跡で、香川県埋蔵文化財センターが昨年度から国道438号の改築に伴って発掘調査を実施してきました。

遺跡の総面積は約4,800㎡を予定し、現在までに掘立柱建物を約20棟検出したほか、残りの良い飛鳥時代の須恵器がまとまって出土した遺構もあります。

岡遠田遺跡とその周辺(国土地理院1/25000地形図を改変して作成)



- 1: 岡遠田南遺跡
- 2: 岡遠田遺跡
- 3: 岡田東下土居遺跡
- 4: 沖南遺跡
- 5: 沖遺跡
- 6: 名遺跡
- 7: 岸の上遺跡
- 8: 遠田遺跡
- 9: 東原遺跡
- 10: 大窪谷遺跡
- 11: 上川井遺跡
- 12: 前谷古墳
- 13: 法勲寺跡
- 14: 大窪池遺跡
- 15: 仁池遺跡
- 30: 讃留靈王古墳
- 32: 下土居遺跡
- 48: 次見遺跡

【2.周辺の遺跡】

岡遠田南遺跡がある岡田台地には、旧石器が採集された大窪池遺跡や仁池遺跡、古墳の周溝が見つかった前谷古墳や上川井遺跡、飛鳥～奈良時代の大型の掘立柱建物が見つかった遠田遺跡、飛鳥～奈良時代の掘立柱建物が数棟見つかった東原遺跡のように、様々な時代の遺跡が点在しています。また、岡田台地の麓には飛鳥時代(7世紀末)創建の法勲寺跡があります。

さらに、岡遠田南遺跡と同様に道路建設に先立って発掘調査を行った岸の上遺跡・名遺跡・沖遺跡・沖南遺跡・岡遠田遺跡が道路の計画線に沿って並んでいます。岸の上遺跡では古墳時代後期の掘立柱建物が見つかり、古代の南海道の側溝と考えられる遺構も見ついています。名遺跡では周辺の地割に沿う溝群が見つかったことで、現代の地割の原型が12～13世紀までに形成されたことが明らかになりました。沖遺跡からは古墳時代中期～後期の溝状遺構が見ついています。沖南遺跡では軒瓦や複数の輸入陶磁器類が出土しており、法勲寺との関連が想定されています。岡遠田遺跡では弥生～古墳時代ころの竪穴建物が約30棟見つかり、飛鳥時代の土器や陶製の土馬など本遺跡と同時期と見られる遺物も出土しました。

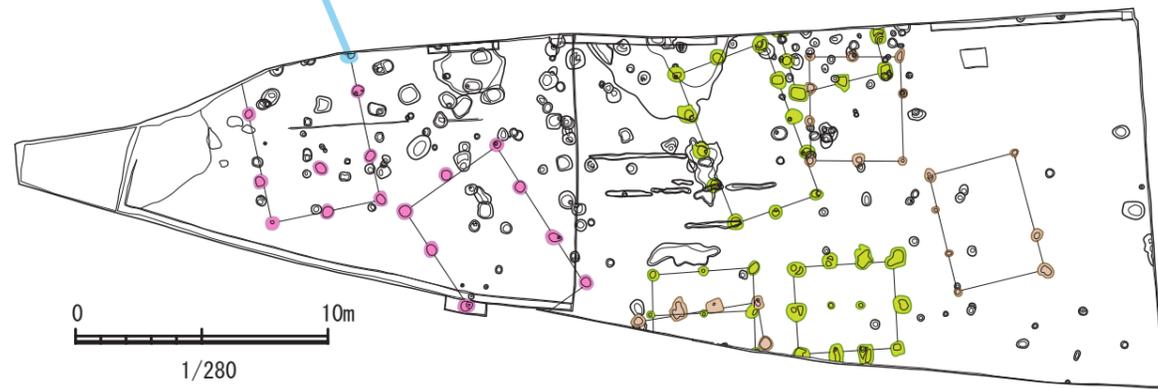
【3. 今回の調査成果】

ここでは、現在調査中の5区と6区について紹介します。なお、調査行程の都合から5区は3区画に、6区は4区画に分けて発掘調査を行っています。また、本日は6月までに調査が完了した国道の東側に位置する3区・4区から出土した土器も合わせて展示しています。

土坑から須恵器壺が出土



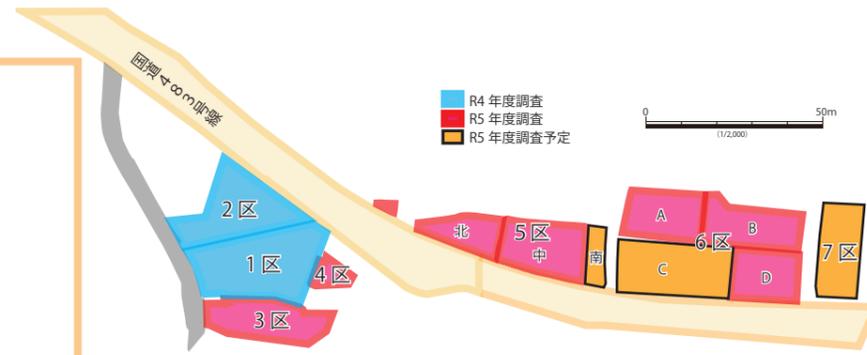
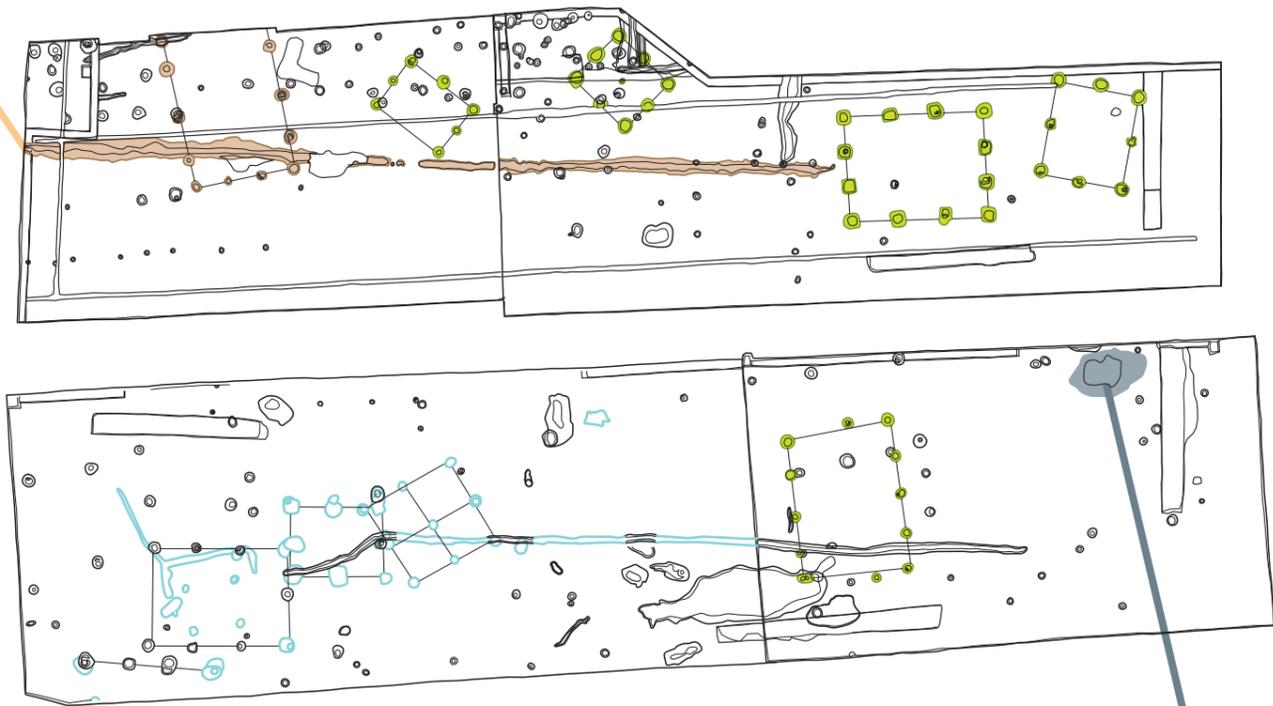
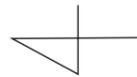
掘立柱建物に関わる可能性がある土坑から須恵器壺が出土しました。頸部は欠損していましたが、底部に貼り付けてある高台や全体の形状から平安時代初頭頃(9世紀)のものと推定しました。



溝から土師質土器が出土



調査区内を南北に縦断する溝から平安時代中頃(10世紀)の土師質土器が1点出土しました。出土した土師質土器は破片ではありますが、底部の形状から平安時代中頃と推定しました。



凡例

- : 古墳末～飛鳥時代
- : 古代末～中世
- : 時期不明

左の写真は本日公開している調査区(5区中)を南側上空から撮影したものです。こうしてみると、複数の建物跡がせめぎあうように建っていることがわかります。

飛鳥時代の土器溜り



窪地に泥が溜まり形成されたとみられる遺構から残存状態の良い須恵器杯類が6点出土しました。内訳は蓋が3個・身が3個であり、そのうち2組はセット関係にありました。時期は須恵器の特徴から飛鳥時代初頭頃(6世紀末～7世紀初め)と推定でき、周辺の掘立柱建物と同時期といえます。